

編集後記

本号には、創刊以来、継続して掲載してきた『古事記』の校訂本文・注釈の続編、「根の堅州国訪問」から「八千矛神」の箇所を掲載した。

本文校訂と注釈は、谷口雅博センター長（文学部教授）を中心とする定例研究会での発表に基づく成果である。なお、定例研究会では、『古事記』を多角的に解釈すべく、毎回、本事業に参画する諸分野の専攻を持つ教員間で意見交換を行っている。本号掲載の九本の補注解説もその成果である。諸分野からの解説は、学際的研究を謳う本事業の特色となっている。

また、定例研究会での発表を踏まえ、三つの論考を掲載している。鶴橋辰成氏の論考は八千矛神神話を「鎮坐」という表記に注目して考察している。藤本頼生氏の論考は異名同種神「阿須波神」の解釈史を踏まえつつ、当該神を祀る神社の地域分布との関係性から、その神格について考察をめぐらしている。松本久

史氏の論考は国学の鼻祖たる荷田春満の『古事記』解釈を検討し、その特徴として指摘される「神祇道德説」について再検討を迫ったものである。

さて、本事業の中核をなす研究活動は定例研究会であるが、広く本事業の成果を社会に共有するため、一般聴衆も対象とした国際シンポジウム・研究会を開催している。本号には、本事業の中間総括として昨年度に開催された国際シンポジウム「古事記と「国家」の形成——古代史と考古学の視点から——」の内容も掲載することができた。本シンポジウムは、本研究事業で初となる学外シンポジウムとして、宮崎県との共催、さらに西都市・宮崎県神社庁の後援のもと、宮崎県立西都原考古博物館にて、平成三十年十一月三日に開催された。日本・英国・韓国、各国の研究者が『古事記』と国家の形成を多角的な視点から議論し、中間総括として相応しいシンポジウムとなった。詳細については、講演録の方をご参照いただきたい。

この他、本号には敷田年治『古事記標注』の翻刻と研究および英訳『古事記』を継続掲載する。本事業の着実な研究成果として御覧いただきたい。

最後に、本学が平成二十八年度に「古事記学」の推進拠点形成——世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信——として文部科学省私立大学研究ブランディング事業に選定されてから、本年度で四年目を迎えた。本学は五年計画であったが、文部科学省の一連の不祥事を受け、平成三十一年二月に文部科学省より研究補助期間を一年短縮する通達があった。したがって、本年が助成期間の最終年度となった。

これを受けて、本学では、令和二年度の研究事業の推進について学内で協議し、本事業を本学の特定推進研究の一つとして位置づけ継続することを決定した。そのため、令和二年度については事業計画に従い、本研究事業五年間の成果の総括に向けて、研究事業を推進していく予定である。

（渡邊）